る。

此の如くこの書を寫した時日は極めて明白であるが、その述作が何時に在るかは明瞭でない。故藤田博士⑩は曾てこれを沙州都督府圖經の斷片と想定し、開元年間、遅くも天寶年間に出來たもので、肅代以後に出來たものではなからうといひ、また貞元宰相賈耽のこれらの地方に關する記事も、頗ぶるこの書に據つたものらしいと說かれたが、これは悉く偶然の誤り⑪と見るべきで、寶應や大中の記事を有する（第三十七行參看）本書が天寶年間に作られた筈は無く、貞元宰相賈耽がこれに寓目し得べき道理も無く、固とよりまた沙州都督府圖經の斷片でも有り得ない。所詮本書の述作は大中四年以後、光啓元年十二月の間（850–886, II）に在つたとする外はない。

五　本書の特徵

此の書が沙州伊州及び多分その近隣諸州を限つた地方的地志の殘卷であらうことは前に述べた通りである。從つてその記事は元和郡縣志や兩唐書地理志の如き一般的地志と比較すると、少くとも殘卷に見える兩州に關する限り、各多少の出入はあるにしても、要するに遙かに綿密であつて、各州縣の戶數、公廨の費用（?）、鄕數、各縣の寺・觀・烽・戍の名稱から所在の山川古蹟風俗等の記事にも及んで居る。たゞ州については貢賦の項を置きながら、その名稱を記してゐない。思ふにこの書の原本に於てこれを缺いて居つたのであらう。若しこれが果して此等兩州以外にも亙つた地志であつたならば、それ等の地方に關しても必ず殘卷に見えるところと同樣に詳細な記事を有して居つたに相違ない。